2019筑波大学附属駒場論集59集

筑波大学附属図書館と附属学校図書館の高大連携

－探究学習を支える学校図書館と後押しする大学図書館－

筑波大学附属駒場中・高等学校　学校司書
加藤　志保

筑波大学附属図書館と附属学校図書館の高大連携

－探究学習を支える学校図書館と後押しする大学図書館－

筑波大学附属駒場中・高等学校　学校司書
加藤　志保

要約

2019 年 10 月 18 日、19 日に全国国立大学附属学校高等学校研究大会（以下、全附連）・図書館分科会（※1）が、本校図書スペースで開催された。全附連において図書館分科会が開催されるのは 2 回目であるが、全附属高等学校 21 校のうち 12 校が参加する会となった。事前調査において 21 校の学校図書館の情報を収集した（項目を抜粋して再構成した一覧表を参考資料として p164 に後掲）。各学校図書館は、概してスペース、蔵書数、人の資源等に乏しい中、附属校で従来より盛んに行われている探究型の学習（SSH 校、SGH 校等）を支えている。本校でそれらの乏しさを大学附属であることを生かして、大学図書館との高大連携によって補い拡充をはかっている。その実践例と今後の展望課題について述べる。

キーワード：高大連携、筑波大学附属図書館、筑波大学附属学校群、学校図書館、大学図書館、SSH 校、SGH 校、IB 校、WWL

1　はじめに

筑波大学附属駒場高校では、高度情報化プロジェクトの一環として 2013 年度より筑波大学附属図書館からの資料の貸出の試行をはじめた。二年の試行期間を経て 2015 年度には資料貸出サービスを高大連携事業に位置付け、対象校を本校だけではなく附属坂戸高校、附属高校にも広げると共に、当初中央図書館のみの資料の貸与だったものを他の図書館群をも含めて行われるようになった。更に三年後の 2018 年度には、新たに「筑波大学附属図書館高大連携サービスパッケージ」と称して、

（1）図書館資料貸出サービス
（2）レファレンスサービス
（3）文献複写サービス

が附属図書館から各附属高等学校三校へ提供されることになった。

本原稿では、2019 年 10 月 18 日に附属駒場で開催された全附連図書館分科会にて発表した、それら大学図書館の附属学校図書館支援取り組みのプロセスと、附属学校図書館の利用実態の事例を軸にしながら、筑波大学附属学校図書館間の連携について述べたい。

2　大学図書館との連携プロセス

2.1　教育の高度情報化プロジェクト

先述のように 2012 年 4 月に始まった教育の高度情報化プロジェクトの一環として、本校図書館の蔵書数の少なさと本校生徒・教員の求める専門性の高い資料の利用ニーズを援けるために、筑波大学附属図書館の支援を仰げないか大学図書館との交渉が始まった。

2012 年 7 月
「教育の高度情報化」プロジェクトとして大学図書館訪問。大学図書館の資料の貸出の検討を依頼。
2013 年 2 月
プロジェクトの一環で大学図書館資料の貸し出し試行が始まる（2015 年 3 月までの 2 か年）

2012 年 7 月の大学図書館訪問により、駒場のニーズについて理解いただき、早速資料の貸出ができるよう条件整備が始まった。貸出の方法、資料の扱い、返却の方法、搬送の方法等、詳細を詰め、必要な送付伝票等を整え、2012 年度の終わり、2013 年 2 月には試行を始めるに至った。

University collaboration between University of Tsukuba Library and School Libraries- School libraries that promote inquiry learning and university libraries that support them

試行期間を高度情報化プロジェクトの終了する2015年3月までと定め、教員への周知を始めた。

生徒からの個別のレファレンスに対し、ニーズの高そうな生徒には大学図書館で保有する資料の検索結果を示し、取り寄せることができることを伝えた。5月にリクエスト第一号の生徒が現れ、チェスの本、数学の本を取り寄せることとなった。この第一号の利用生徒は2019年度に教育実習生として本校に戻ってきた。大学図書館へのリクエスト依頼のことを覚えているか問うと、リクエストした本の古めかしい表紙の手触りまで覚えていたことを、喜びをもって記したい。

2.2　プロジェクトを離れ附属学校支援へ

2015年3月
　プロジェクト終了後も継続決定（2018年3月までの3か年）
　＊中央図書館以外4館（体芸、医学、図情、大塚）も借りることのできる対象になる
　＊筑波大学附属坂戸高校（以下、附属坂戸高校）、筑波大学附属高校（以下、附属高校）も貸し出し可に。

資料貸出の試行期間は2015年3月に終了したが、年間60冊強のニーズがあり、引き続いて大学図書館の貸出を受けられることとなった。本格稼働に際し、試行期間は中央図書館の所蔵資料のみが貸出可能であったのが、他の4館（体芸、医学、図情、大塚）からの貸出も可となった。

図1.　筑波大学図書館作成・附属校資料貸出ポスター

また、附属坂戸高校が国際バカロレアの申請をするにあたり、バカロレア条件として学校図書館の設備（蔵書数、多言語資料の準備、利用できるデータベースの整備等）の不足を駒場が実施している大学図書館からの支援によって補えないかとの構想も持ち上がり、それらに伴い、附属坂戸高校、附属高校も貸出支援を受けられることとなった。

2.3　高大連携へ

2016年4月
　故筑波大学平久江祐司教授と共に附属校学校司書にて研究活動開始（※2）
2016年8月
　大学図書館、佐藤初美課長を訪問。附属学校図書館のニーズについて懇談会実施

2016年度に筑波大学情報学群知識情報・図書館学類の故平久江教授と共に文部科学省の助成を受け、筑波大の附属学校司書共同で附属学校図書館群について調査研究を行った。各校の状況と、課題とそれに対し学校間連携で補填したり支えたりできることがあるか検討した。

調査研究の一環として、8月には大学図書館に赴き懇談の時間をもってもらった。附属学校のニーズをお伝えしながら、大学図書館からの情報を提供していただいた。

2.4　高大連携パッケージ

2018年6月
　学術情報部アカデミックサポート課村上康子課長による各附属高校のヒアリング開始。
2019年2月
「高大連携サービスパッケージ」の提示

調査事業から2年後、2018年度には筑波大学アカデミックサポート課課長に新たに就任した村上課長により、各附属高校の訪問とヒアリングが行われた。

本校では、図書館で行われる授業の様子やお昼休みの生徒の様子を見ていただくと共に、司書・司書教諭だけではなく、図書メディア委員生徒へのヒアリングも行われた。

その結果、2018年度末の2019年2月には附属図書館より「高大連携サービスパッケージ」を提示いただいた。先にも示したが、高大連携サービスパッケージ

の内容は下記3点からなる。
（1）図書館資料貸出サービス
（2）レファレンスサービス
（3）文献複写サービス
（1）の資料貸出以外の（2）、（3）については新たに立ち上げられた支援内容である。
（2）のレファレンスサービスは、大学図書館に「学校図書館専用レファレンス窓口」として連絡先を設けていただき、各附属の学校司書を通じてレファレンスを依頼する。専用窓口があることで学校司書も安心してレファレンスの依頼ができる。
（3）の文献複写サービスは、大学図書館が持つ資料に対して複写依頼を行うと郵送あるいはデータ送付にて、届くサービスである。画期的なのは会計システムも巻き込んだ改革で、初期登録を済ませておけばお金のやりとりをせずに複写を取り寄せることができる。事務室を通じて煩雑な書類のやりとりで負担と手間をかけなくていいと思うと、心的ハードルが下がり利便性が高まった。2019年度には、これらの連携サービスが本格的に始動している。

3　附属学校図書館の取り組み

大学図書館からの資料貸借にはじまった連携サービスだが、これらを附属校ではどのように活用しているか、活用の実態について紹介する。

3.1　筑波大学附属駒場中・高等学校

3.1.1　資料の利用

駒場での資料貸出の状況は以下の表のとおりである。

表1.　筑波大図書館からの資料利用（年間貸出数）

年度	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
冊数	53	68	69	68	57	75	(54)

＊2019年度は年度途中の暫定値

おおよそ、年間60～70冊前後で安定的に推移している。分野としては理数系や医学系、地理歴史系の専門書が多く、ここ数年は情報系の資料も増えている。2015年度から医学図書館や、図情図書館の資料を借りられるようになったメリットは年を経るごとに高くなっている。
本校では大学図書館の資料を利用できることを学内に伝え、かつ利用をスムーズにするために、2013年度に検索サーバー「筑駒検索システム」を開発した。本校図書館、大学図書館、論文等を串刺し検索できる検索システムだ。開発のプロセスについては、駒場論集54号にて詳述している（※3）。
生徒に向けては、生徒手帳や入学時オリエンテーションで、大学図書館の資料を利用できることを説明し、筑駒検索システムで検索することにより、本校図書館と大学図書館の検索結果が串刺しして立ち現れることを示している。日常的に筑駒検索システムを用いて検索結果を目にすることが、同時に大学図書館を利用できることの認知にもつながると考えていた。

3.1.2　レファレンスサービス

新たに始まったレファレンスサービスは、パッケージを提示された翌月にすぐに利用することとなった。「ドイツ語原作の翻訳児童小説について、その英語バージョン（英訳版）を読みたい」というレファレンスがあり、外国語資料の調査方法に精通していないため、大学のレファレンス窓口に相談した上で、資料捜査を行った。結果的には抄訳以外の全訳は無いという回答を得て、1週間ほどで依頼者に伝えることができた。

3.1.3　文献複写サービス

文献複写に関しては、2019年度は司書自らが積極的に使ってみて、利用法を身に着けることを心掛けている。たとえば今年度の本校の芸術鑑賞会にて鑑賞した東京都美術館の「ハマスホイとデンマークの美術」展の「ハマスホイ」はジャパンナレッジでも項目として取り上げられない知られざる画家である。
2008年に国立西洋美術館で開催された「ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情」展の周辺で、雑誌等で紹介された当時の文献を大学図書館から取り寄せ、本校図書館内での画家や作品紹介の展示の作成を試みた。

3.1.4　「学術情報の探し方」講座の講師として

これまで「高大連携サービスパッケージ」の3つのプログラムの利用を紹介したが、3つ以外に本校では大学図書館スタッフによる生徒への講座を行っている。
本校はスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定校になっており、各教科がそれぞれにSSH事業に取り組んでいる。その内の技芸科主催のSSHシリーズセミナー「メディア虎の穴」の「学術情報の探し方」に、筑波大学・学術支援担当から2018年度は渡邉朋子氏、2019年度は大和田康代氏にゲスト講師で協力いただいた。
当日は、本セミナーを受講する有志生徒・ゲスト生徒に対し「CiNii Article」で先行研究の論文を効率的

に探す方法と、「e-Stat」を用いた統計データの探し方、「白書」の用い方について講義いただいた。

図 2.　講座を行う学習支援担当大和田氏

講師を務めていただいた渡邉氏・大和田氏は大学スタッフとして日常的に接する大学生ではない、中 3・高 1 の生徒向け講座ということもあり、教材に工夫を凝らし念入りに進行を練って下さった。受講した生徒にとっては、大学生を教える講師の講座である緊張感と、大学でも用いられている学術的に有効な資料を効率的に使う方法を知る喜びを含む感想を聞くことができた。以下、生徒の感想である。

「いままで、論文や統計を調べるときに正確な情報を得る方法がわからず苦労することが多かったので、今回の授業は非常にためになった。特に OR、NOT などは非常に便利でこれから使っていきたいと思った。これから高校生になると専門的なことを調べる機会が増えると思うので、今日学んだことを生かしていきたい。」

「どれも一度は利用したことがあるサービスだったが、調べ方のコツを学ぶ事ができてよかった。今日まさに Google 検索して出てこなかったような情報が CiNii やレファレンス協同データベースで検索すると出てきたので、感動しました。今後よりたくさん利用していきたいと思います。」

「レポートを書くたびに参考文献探しに時間をかけていたので、今回の講義で探し方がわかった。もっと早く知りたかった。今後、レポートが書くことがあったら活用していきたい。」

図 3.　講座を受講する生徒

二度の講座を経て、中 3 あるいは高 1 の全生徒が同様の講義を受けることができたならば、「探究」をより充実したものにできるだろうし、実際の「人」を通して筑波大をより近くに感じ「高大連携サービスパッケージ」の利用をぐっと促進できると考えるようになった。今後につなげたい取り組みの一つである。

ここまで本校の取り組みを紹介してきたが、他の附属学校はどうか。全附連での発表および情報交換で提供された各校の現況を参考までに紹介したい(以下は、附属高校司書謝花孝子氏、附属坂戸高校司書白塚禎子氏に許可を得て、発表資料および発表内容を再構成したものである)。

3.2　筑波大学附属高等学校

附属高校の図書館は特別教室棟の南側に位置したプレハブ一階建ての建物で、総面積 280 ㎡におよそ 2 万 5 千冊の蔵書を所蔵する。

図 4　筑附高校図書館・入口

図書館は、教職員５名、司書１名からなる図書進路部に位置づき、図書館の入り口前のスペースは進路関係の資料を備えた談話室になっている。

3.2.1　SGH スタディと図書館

附属高校では、2014 年から 2019 年まで、SGH に取り組んだ。1 年時には総合の時間に「SGH スタディ」という科目を開設。「科学の考え方」「統計的なものの見方」「データの収集・分析」「プレゼンテーションの仕方」など基礎的技能の習得を目的として実施、学校図書館においても「情報収集の仕方・考え方」を学ぶ講座が行われるようになった。

図５　筑附高校図書館・館内の様子

2、3 年時になると、グループまたは個人で、グローバルな課題を発見し､課題に関 する調査･研究を行い、議論をし、解決法を発表・提案する「課題研究」が行われ、それらの研究への資料提供等、学校図書館に果たせる役割は大きかった。しかし、研究テーマの共有などが不十分であり、資料の不足を補うための大学図書館利用については検討が遅れ、利用が始まったのは 2018 年度、SGH 終了の年になってからであったのが残念だ。

3.2.2 大学図書館利用の実際

附属高校では、2016 年 9 月に筑波大学とお茶の水女子大学で結ばれた大学間連携協定により、教職員・生徒共にお茶の水女子大学附属図書館（以下、お茶大図書館）を利用できるようになった。これも高大連携の一端と言えよう。

生徒、教職員共に、附属高校司書が利用者カードを発行する。それを持参することで大学への入構、図書館への入館、資料の貸出ができる。利用の様子は表 2 の通りである。

表 2.　お茶大図書館からの資料利用（年間貸出数）

	年度	2017	2018	2019
入館者	生徒	10	109	(85)
	教職員		6	(1)
貸出数	生徒	61	59	(39)
	教職員	13	2	(0)

＊2019 年度は 4 月から 8 月

お茶大と筑附高校は道路を挟んで向かい合う立地の良さもあり､周知を勧めるに連れて利用が増えている。

筑附高校のお茶大図書館からの資料の貸出数は、本校が筑波大図書館から取り寄せている冊数に近い。駒場の生徒教職員と異なり、書架を見ながら資料を吟味できるブラウジングを含めた利用の利点から、今後さらに利用数を伸ばす可能性が高い。

3.2.3 高大連携サービスの課題

附属高校が筑波大学図書館を利用するにあたって、お茶大図書館の利用と照らしながら浮き彫りになった現在の課題は下記の 4 点である。

・生徒にとって大学附属図書館が身近に感じられない
・貸出申請から資料が手元に届くまでのタイムラグ
・司書の申請による貸出履歴の秘匿性の問題
・貸出・返却時の送料負担

またお茶の水女子大学附属図書館の利用が生徒にいき渡るようになってきて気がついた点として、お茶の水女子大学の入構におけるセキュリティの厳しさがハードルになったり、大学図書館を自習スペースとして利用してしまう問題や、資料の延滞の問題がある。しかし、ほぼすべての生徒が大学に進学する附属高校にとっては、高校生のうちから近接する大学図書館を利用することで、大学へのイメージを広げたり、モチベーションを高める効果が高い。高大連携の実りある産物である。

3.3　筑波大学附属坂戸高等学校

3.3.1IB 認証校として

附属坂戸高校は 2017 年に国際バカロレア（IB）校として認定を受け、2018 年 4 月より国際バカロレア日本語ディプロマプログラム（IB）コースを開講、入学を開始した。

国際バカロレアの認定を受けるにあたって、認定の基準の中で学校図書館は重視されている（「図書館、マ

ルチメディア、およびリソースが、プログラムの実施において中心的役割を果たすこと」【基準 B2】リソースと支援　第 6 項（※4)）。いくつかの IB 校に話をうかがったところ、いずれの学校でも認定前の調査で下記のようなことに重点をおいてヒアリングを受けていた。

・多言語の資料がそろえられている
・データベースや、オンラインでの資料アクセスが可能となっている
・十分な広さと資料がそろっている
・常駐するスタッフが居る

附属坂戸高校の学校図書館においては、広さ、資料、アクセス等が不十分であった。そのため認定基準を達成するための準備がはじまった。

図 6.　附属坂戸高校・旧図書館の様子

ひとつは蔵書数、蔵書構成に関して、本校で実施していた大学図書館からの資料の貸借を附属坂戸でも行うことによって蔵書の数および特に多言語対応した資料の構成を補完することができるかどうかが検討され、基準をクリアすることができた。

そして 2016 年 6 月には、学校図書館を移転（C館 3 階奥からＢ館 1 階)、館内を充実するため大々的に改築が行われた。

3.3.2 新図書館に変わって

旧図書館に比べ新図書館は教科の準備室にフロアを同じくしている。教員が足を運びやすく、授業準備においても、授業そのものでも利用しやすくなった。

図書館前のスペースの「生徒ホール」はテーブルやイスが設置され、自由に動かせるパーテションによって個人やグループで使える自由空間になっている。「生徒ホール」を目的に来た生徒たちが図書館にも立ち寄って行く生徒の導線ができた。図書館内は絨毯敷きになっており、入口で上履きを脱いで入るため、くつろぎ易く、癒しの空間になっている。

図 7.　附属坂戸高校・新図書館の様子

これら立地や空間内の変化により教員、生徒にとって身近な図書館になると同時に、教育研究活動の進展に伴う図書館の位置づけの変化もあった。

ひとつはこれまで述べてきた IB の新設であり 2017 年 2 月に認定を受け、2018 年度より IB コースへの入学生受け入れが始まっている。

もうひとつは「ワールド・ワイド・ラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業」の拠点校となったことだ。「拠点校は、イノベーティブなグローバル人材を育成するため、文系・理系を問わず各教科をバランスよく学ぶ教育課程を編成し、また、グローバルな社会課題研究のテーマ（SDGs、経済、芸術等）を設定し、留学や海外研修等を含む先進的なカリキュラムの研究開発・実践、テーマと関連した高校生国際会議等を開催、大学の先取り履修を可能とする取組、より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境整備、留学生受入れに向けた学校体制の構築などを行」（文部科学省 HP より）うために、国際的な高度な学びを実践していく環境整備を行っていくことになる。この取り組みにおいて高度な学びを支える学校図書館の重要性が高まっている。

3.3.3 高大連携サービスへの期待

これら新たな教育研究活動以前から、３年生の必須科目として「卒業研究」を行っている。ひとりひとりが設定したテーマに応じて研究活動を行い卒業論文を作成する。160 名の個々それぞれの研究テーマに沿った資料を坂戸高校の図書館内ですべて提供するのは難しく、専門性の高い資料という点でも大学図書館の所

蔵資料の利用が欠かせない。3 年の卒業研究時に大学図書館の資料を使いこなせるように、1、2 年次から利用経験を積むことが望ましい。

さらに IB 生は「課題論文」という、ひとつの物事を深く知り、分析を行い論文を作成する授業が加わった。その為には本の資料だけではなく、論文等の資料に触れる必要も増え、また個別に掘り下げるためのレファレンスサービスを備えておくことも不可欠である（※5、6）。高大連携サービスパッケージにて示されている支援内容は、IB 生の授業運営においても重要な要素となっている。

4　附属学校図書館の今後の課題と展望

4.1 本校生徒の利用実態–アンケート調査より

本校に話を戻そう。2019 年の夏に大学図書館の利用ならびに筑駒検索システムの利用について中学・高校の全校生徒にアンケートを実施した。図 8～12 がアンケート結果である。

大学図書館を利用できることを知っているか尋ねたところ、半数は知らないと答えている。

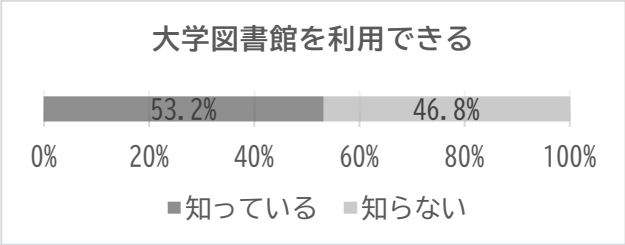

図 8.　筑波大図書館利用の認知度

大学図書館の「本」について尋ねたところ、読みたいと思ったことのある生徒が 30%居るのに対し、実際に所蔵している本を調べたことがあるのは 18%、本をリクエストしたことがあるのは 5%しかいない。

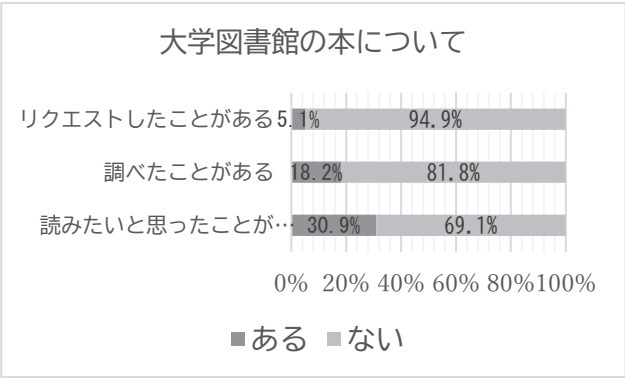

図 9.　筑波大図書館の資料利用

この結果から、

・半数の生徒は大学図書館の本を利用できることを知っているので、その割合をあげていくこと。

・利用したいと思ったことがある生徒 30%と、実際の利用にいたった 5%の溝を埋めていくこと。

この二点が高大連携を進めていく上での第一の課題であることが明らかとなった。

続いて「筑駒検索システム」について使ったことがあるかどうか訊いた。

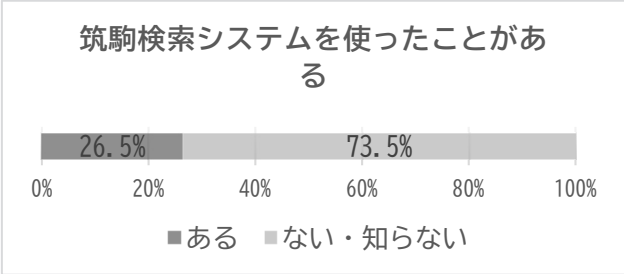

図 10.　筑駒検索システムの使用

2019 年度に在学する生徒は、入学時には既に「筑駒検索システム」が導入されていた世代で、入学時オリエンテーションでは紹介しているが、「使ったことがない、知らない」という回答が 4 分の 3 にのぼる。

使ったことのある生徒に、使った目的を聞いた。

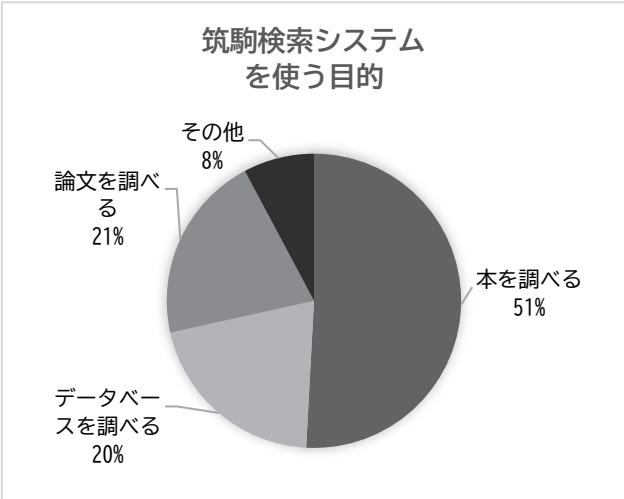

図 11.　筑駒検索システムを使う目的

「本を調べる」つまり蔵書の検索を目的とした者が半数、データベースや論文を目的とした用途がそれぞれ 2 割ずつといったところである。

具体的に用いたコンテンツのうち「よく使う・月に数回使う」利用頻度を示したのが図 12 である。

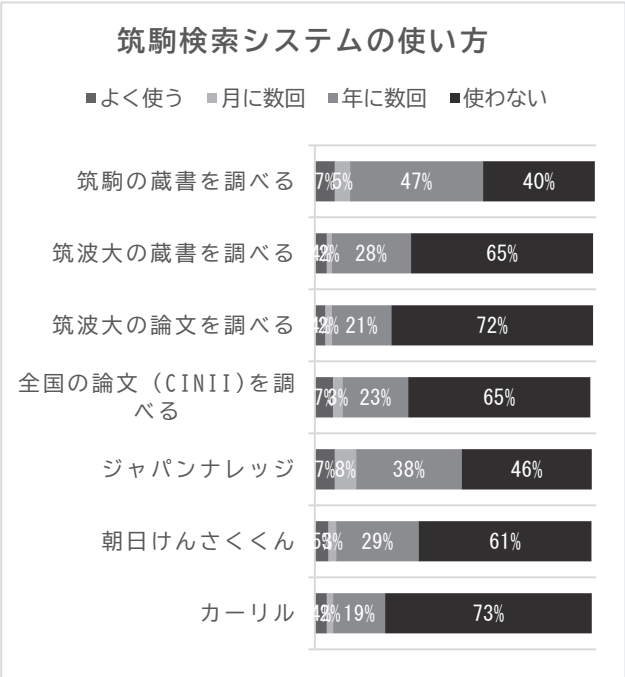

図 12.　筑駒検索システムで用いるコンテンツ

筑駒図書館の蔵書検索で 12%程度、大学図書館の蔵書検索と筑波大の論文検索が各 6%、CiNii で 10%、ジャパンナレッジ 15%、朝日けんさくくん 8%、カーリル 8%である。

これらのコンテンツ利用については、2014 年に筑駒検索システムを導入した直後に中 1 生を対象に当時の本校教員澤田英輔氏がアンケートを行っている（前傾※3 に詳述）。そのアンケートでは、今後これらコンテンツを使うかどうか予期を尋ねている。その 2014 年時の予期に対し、2019 年時は実際の利用について尋ねた結果を比較したのが図 13 である。

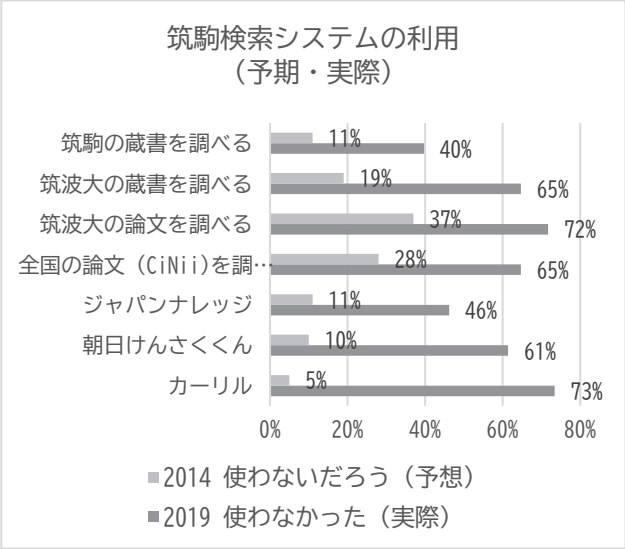

図 13.　筑駒検索システムの利用（予期・実際）比較

2014 年時の「使う」「使わない」の二択に比べて、2019 年時のアンケートにおいて利用の項目が「使う、月に数回使う、年に数回使う」と幅があったため、よりわかりやすいように「使わない」と答えた割合で比較した。

2014 年時に「使わない」と予想した割合よりも、実際に「使わなかった」割合が、いずれのコンテンツについても多い。

ちなみに 2014 年時に中 1 だった 68 期生は、2019 年時に高 3 となった。2019 年時のアンケートにおいて、68 期生（高 3 生）は大学図書館利用については 8 割の生徒が知っており、筑駒検索システムについては 6 割の生徒が使ったことがあると答えている。筑駒検索システムを使ったことがある 68 期生のコンテンツ利用に関して、2014 年時の予期と 2019 年時の実際とで比較したのが図 14 である。

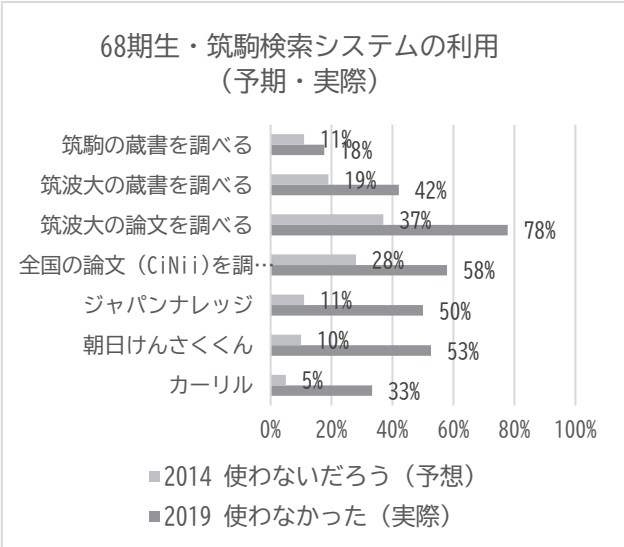

図 14.　68 期生の筑駒検索システムの利用（予期・実際）比較

68 期生の内訳では、筑駒検索システムを介して大学図書館の本を調べたことの無い生徒が約 4 割、大学の論文に関しては 8 割の生徒が調べたことが無い。いずれの項目でも予期のおよそ 2 倍以上が、使わずに 6 年間を過ごしたという調査結果になった。

4.2 高大連携サービスの利用を促進するための方法

現在の筑駒検索システムは、本校の契約データベースを同時検索できる利点がある。「本校図書館」「筑波大学図書館」「カーリル（公共図書館）」「CiNii」と「ジャパンナレッジ・スクール」の串刺し、あわせて「朝日けんさくくん」へのジャンプである。しかし、「ジャパンナレッジ」は 2021 年から個別 ID 認証型へ変更に

なる。個別 ID になれば、串刺し検索はできなくなる一方で、校外でも個人のスマホや PC での利用ができ、自宅学習でもジャパンナレッジを用いることができるようになる。「筑波大学図書館」「カーリル」「CiNii」はそれぞれオープン検索が可能なリソースである。本校図書館の蔵書検索についても、2019 年 12 月に、附属高校と附属中学にならってオープン検索が可能なタイプに変更した。

今後は、筑駒検索システムの特別な URL を覚えるステップを省いて、「筑波大学図書館」「カーリル」「CiNii」を個別コンテンツとして使いながら、高大連携サービスの利用を身近なものにする方法を探る必要性がある。

4.3 より広い利用を支えるために−高大連携から、校種を越えた附属校連携

高校と大学の高大連携について述べてきたが、附属高校間や附属中学間との資料の貸し借りも実験的に取り組みはじめた。やってみると年間 10 数冊のニーズがあるのがわかった。小中高大と縦の連続性、高校同士・中学同士の横の広がりを活用できるのが複数の附属校があることの利点だ。その利点は最大限活用することが、小学校からあがってきたばかりの中学 1 年生から大学生顔負けの活動をしようとする高校生までが利用している本校の図書館の課題をクリアしていく方法だと考えている。

高大連携サービスの推進役を果たしている村上氏は「顔を合わせた信頼関係を作ること」が連携を進める肝であると述べ、2019 年 10 月の全附連学校図書館部会にもオブザーバーとして参加して下さり、そのことにより附属小学校から大学までの司書が一堂に会することが叶った。今後も引き続き互いの図書館の書架の配置まで思い浮かべられる「顔を合わせた」関係性を発展させて、校種を広げた附属校図書館の連携を形づくっていきたい。

【参考文献】

※1.梶木尚美、澤田英輔、加藤志保（2018）「 国立大学附属学校図書館、始まる連携 ： 全附連高校部会「学校図書館分科会」開催報告」『学校図書館』812 号、P65-67

※2.平久江祐司、加藤志保他（2017）『学校司書の資格・養成のあり方や資質能力の向上等に関する調査研究事業』

※3.三井田 裕樹、澤田 英輔、加藤 志保（2015）「「筑駒研究情報検索システム」の開発と評価」「『筑波大学附属駒場論集』第 54 集、P185-196

※4.非営利教育財団国際バカロレア機構（2014）『プログラムの基準と実践要綱』P4

※5.全国学校図書館協議会（2019）「特集　国際バカロレアを支える学校図書館『学校図書館』824 号

※6.東京学芸大学学校図書館運営専門委員会(2017)「教育の新動向と学校図書館第一部「高等学校の高度教育と学校図書館－国際バカロレアを中心に」小野 永貴氏」報告」『学校図書館活用データベース』

(http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/index.php?key=jo88vinvp-113　2020 年 1 月 9 日アクセス)

謝辞

本稿を執筆中に、筑波大学情報学群知識情報・図書館学類の平久江祐司教授がご逝去されました。本校図書館のリニューアルに当たっては、幾度も本校に足を運び館内のゾーニングへのアドバイスや、ワーキンググループの生徒たちに学校図書館の考え方について講義を行っていただき、リニューアル案のコンペ大会では選考委員長を務めていただきました。現在の本校図書館はそれらをベースとして成っています。

また筑波大学附属中学校の図書館においては、学校司書不在の長い時期を経て二年前に司書配置が叶うまでの間、平久江先生は学校司書の必要性を内外に説かれると共に、附属中学校の図書館にも幾度も足を運ばれ必要な環境、必要な資料についての助言を繰り返して下さいました。それらの結果学校司書の常駐と蔵書の電算化が実現したばかりです。筑波大学附属学校群の学校図書館の整備を支えた平久江先生の多大なご功績と私たち学校司書を励まし続けて下さったことへの感謝の意をここに記します。

2019　全附連・学校図書館概要　一覧(項目抜粋)

附属高校名(略称)	生徒数	司書	司書教諭	予算(円)	蔵書(冊)	貸出数	新聞	雑誌	データベース	Wi-Fi	PC	面積	授業(時/月)
筑附	710	1	1	206万	21,173	2,001	3	14	1	無	6	280㎡	6
筑駒	861	2	1	350万	22,560	5,660	5	25	2	有	4	285㎡	20
筑坂	480	1	1	140万	35,912	1,861	6	20	0	有	5	331㎡	24
東大	720	2	1	170万	32,000	4,493	3	12	2	有	24	291.4㎡	29
学芸	981	1	1	300万	34,000	5,070	5	75	2	有	8	359.25㎡	13
学芸国際	749	1	1	200万	27,900	5,935	5	18	4	有	35	326㎡	32
東藝	121	1	-	53万	15,000	850	2	8	0	有	2	129㎡	0.1
東工	581	1	1	92万8千	39,500	959	2	28	0	有	1	262㎡	0
お茶	366	1	3	170万	18,172	3,207	5	15	2	有	1	166㎡	0
金沢	363	1	1	30万	20,662	945	7	5	1	有	1	140㎡	0
名古屋	595	2	発令無し	250万	48,577	6,119	4	29	1	有	6	434㎡	20
愛教	598	1	2	70万	31,115	2,304	3	9	0	無	3	282㎡	6
京教	543	0	1	175万	58,174	259	1	17	1	無	4	460㎡	1
大教天	940	2	1	80万	20,000	1,800	2	13	1	有	0	348㎡	-
大教池	492	1	1	110万	17,000	1,800	0	9	0	有	2	158㎡	1
大教平	692	1	0	133万	20,251	5,088	2	14	0	無	1	250㎡	18
奈良	726	1	1	240万	40,510	6,797	7	22	1	有	11	358㎡	-
広島	972	2	2	230万	61,011	6,037	5	15	0	有	2	292㎡	4
広島福	964	-	2	157万8千	50,120	2,513	6	14	1	有	8	513㎡	3
愛媛	357	0	1	23万	15,189	410	3	4	0	無	4	174㎡	24
神戸	784	2	2	215万	19,704	3,842	1	4	0	有	1	119㎡	10